

今、なぜ「国家」が問われるのか？

天と民の間で

中国における「共在」の哲学とその射程

石井剛、東京大学

2022年12月10日

1 專制的伝統と近代中国

- ❖ 保皇改革派 vs. 革命派
- ❖ ばらばらの砂
- ❖ 梁啓超 (1873-1929) 「新民」創出の必要
- ❖ 孫文 (1866-1925) 三民主義 (民族、民権、民生)
- ❖ 郡県制 (秦漢以降) vs. 封建制 (周)
- ❖ 章炳麟 (1869-1936) 西順蔵 (1914-1984) 「人民」
- ❖ 汪暉 (1959-) 政治の中性化、脱政治化
- ❖ 足立啓二 (1948-)

国というのは民が集まってできたものである。国に民がいるのは、あたかも身体に四肢や五臓、筋肉や血液があるようなものである。〔中略〕民が愚昧で臆病、ばらばらで混乱しているのに、それでもなおも国を立てることができるものはいない。したがって、その身の長寿を願うのであれば、摂生の方法を明らかにしなければならず、その国の繁栄を願うのであれば、新民の道を論じなければならない。

(梁啓超『新民説』10頁)

論者は大昔に復帰して、それに西洋の立憲制を結びつけようとする。凡庸な者は軽々しく日本を模倣しようとする。かれらは、西洋と日本が封建時代から近く、中国が封建時代から遠いことが分っていないのである。封建時代から遠ければ、民はみな平等であり、封建時代から近ければ、民に貴族と庶民の身分がある。立憲制を模倣して民に貴族と庶民の身分を生ずるよりは、王者一人が上で政権を掌握し、制度が粗放で監視が行きとどかず、民が長生きできる方がよい。

(章炳麟「代議制は是か非か」、『章炳麟集』412頁)

2 人民主權と天民關係

- ❖ 民族自治区 多民族国家 (multi-national state)
- ❖ 清帝退位詔書 (1912年) 「天下を公と為す」
- ❖ 高全喜 (1962-) 立憲モメント
- ❖ 平岡武夫 (1909-1995) 天下的世界観
- ❖ 経書と経学

民は、天と関連を持つのみであって、王に対しても官僚に対しても、かかる連帯性をもって述べられている所はまったくない。天と民は一つの世界を構成し、王と官僚がまた一つの世界を構成する。もしいわゆる国家の概念に近いものを求めるならば、王と官僚の世界においてのみ、なお幾分か類似するものを見出し得るであろう。しかし天とともにある民は、超国家的な存在であり、いわば国家の彼方にあるものである。もしこの民をも包括して考えるならば、周の人々の世界は、これを天の理念を共有する世界すなわち「天下」と呼んで、他の社会構成の形式より区別することが必要であると思う。彼らは氏族社会より直ちに特異な構成をもって、天下的世界へ移行したのであって、一般的な国家を組織することがなかった。中国文化の特殊性は、殆どそのすべてが、この天下的世界観の特殊性に起因しているのである。〔中略〕尚書が、その歴史性を越えて、経典としての普遍性を持つに至ったのは、主としてこの天下的世界観の超時代性に原因する。実にこの天下的世界観は、周王朝の滅亡の後にもなお二千年、民国革命によって、殷周の際にも比すべき大きな歴史の転換が行われ、その「民国」の名、あるいは「三民主義」の理念が示すように、民の存在が第一義的に考えられ、政治に連帯関係を持つようになるまで、歴代の中国人の精神生活を、その公けの面において規制していたのである。

(平岡武夫『経書の成立』222頁。漢字仮名遣いは改めた。)

3 新しい天下システムは可能か

- ❖ 『礼記』 礼運篇 「大同」 論 「天下を公と為す」
- ❖ 康有為 (1858–1927)
- ❖ 新経学、正史編纂事業 (「清史」)
- ❖ 趙汀陽 (1961-) 天下システム論
- ❖ 共在 (co-existence) 「共在は存在に先んずる」
- ❖ 荀子 「人は生まれながらにして群れなきこと能わず」、礼
- ❖ マイケル・ピュエット (Michael Puett)
- ❖ 関係理性

- ❖ 君臣、父子、夫婦、兄弟 対偶的倫理
- ❖ 譚嗣同 (1865–1898) 小我から大我へ 仁の思想
- ❖ 章炳麟 我執、法執
- ❖ 「無外」、「世界の世界化」

4 天なき世界は可能か

——趙汀陽「天下システム」論の射程——

- ❖ ステファン・アングル (Stephen Angle)
- ❖ システム化権力
- ❖ 一帯一路
- ❖ 梶谷懐 (1970-) テクノロジー・ユーフォリア

参考文献 (日本語で読めるもののみ)

- ❖ 葛兆光『中国は“中国”なのか 「宅茲中国」のイメージと現実』、橋本昭典訳、東方書店、2020年
- ❖ 葛兆光『完本 中国再考』、辻康吾監訳、永田小絵訳、岩波現代文庫、2021年
- ❖ 梁啓超『新民説』、高嶋航訳注、平凡社東洋文庫、2014年
- ❖ 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』、東京大学出版会、1996年
- ❖ 章炳麟『章炳麟集』、西順蔵・近藤邦康編訳、岩波文庫、1990年
- ❖ 譚嗣同『仁学』、西順蔵・坂元ひろ子訳注、岩波文庫、1989年
- ❖ 西順蔵「中国近代思想のなかの人民概念」、『西順蔵著作集』第2巻、内山書店、1995年。初出は1960年
- ❖ 汪暉『世界史のなかの中国』、石井剛・羽根次郎訳、青土社、2011年
- ❖ 汪暉『近代中国思想の生成』、石井剛訳、岩波書店、2011年
- ❖ 足立啓二『専制国家史論 中国から世界史へ』、ちくま学芸文庫、2018年。初版は柏書房より1988年刊行
- ❖ 康有為『大同書』、坂出祥伸訳、明德出版社、1976年
- ❖ 平岡武夫『経書の成立』、創文社、1983年。初版は全国書房より1946年刊行
- ❖ 福嶋亮大『ハロー、ユーラシア 21世紀「中華」圏の政治思想』、講談社、2021年
- ❖ 片岡大右「アジアの複数性をめぐる問い 加藤周一、ホー・ツェーニン、ユク・ホイの仕事めぐって」、『群像』2022年7月号
- ❖ 梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』、NHK出版新書、2019年
- ❖ マイケル・ピュエット、クリスティン・グロス＝ロー『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』、熊川淳子訳、早川書房、2016年